
お気楽な言葉

なかなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お気楽な言葉

【Nコード】

N3408L

【作者名】

なかなか

【あらすじ】

雄一が通う学校には、めちゃくちゃなルールがあった。

【欲しいものは、週一大会で手に入れる】

そのルールに振り回される学校を描いた学園コメディー。

一限目 部屋のない教室

キンコンカンコン

「遅刻ギリギリ」

「アウトだ!」

ゴンッ!

上はスーツ、下がジャージという独特な格好をした、いかにも体育の教師のような男に殴られる。

「早く教室に行け!」

「…わかったよ

大場先生」

大場の横を通り抜けて、教室へと入って行った。

「アイツなんで進級出来たんだ…」

大場は、一人で呟いた。

「クシゅン……

にしてもオレ、よく進級出来たな…」

自分で言っていれば世話ない……

教室の近くまで来ると、一つだけ異様に静かな教室があった。

「よかった…」

あいつらとは違うクラスか…」

ホッとしながら、教室に入ろうとすると

「ちょっと待て」

「なんすか？大場先生ってか足早いっすね…」

「お前そこの教室じゃないだろ」

大場の一言に多少の沈黙が流れる。

「オレ、去年1組でしたよ」

「それは中等部までだろう」

今年から7組だろう」

「……ウチの学年6クラス編成ですよね？」

「今年から7クラスだ」

手を叩いて、納得する生徒。

しかし、教室を端から順に見ていくが6組までしかなかった。

「先生…7組がないんですが…」

「7組は別棟だろう」

「別棟なんてないじゃないですか」

「あるだろうアレだ」

大場が指をさした方向を見ると、体育館があった。

「体育館ですか？」

「まさか…その奥だ」

「……………わかりました、オオバカ先生」

ゴンッ！

「早く行け！」

「……………わかりました」

頭の大きなコブをさすりながら、歩いて行つた。

体育館の裏側に行くと、机と椅子が並べられていた。

「外にあんのかよ……」

「おう！雄一遅かったな」

雄一とは、中1年の時から仲が良かった啓之が手を振っていた。周りを見ると、どことなく見たことある顔が集まっていた。

「雄一もいるねえ」

「オゝ佐山！ってことは…もしかして…啓之もいるな」

「今、手振ってたじゃねえか！」

三人でワイワイ騒いでいると、また一人の生徒がやって来た。

「よゝ何してんねん？」

「関西！」

「お前もかよ」

「しゃゝないやんけ」

オオバカに言われたんやから」

関西と呼ばれた生徒は、口は悪いが女子である。

そして、三人が教室にやって来た。

「一樹！二美！」

「どっちがどっかわからないけどな…」

「ズボンを履いてるのが……どっち？」

「一樹ですよ」

机に鞆を投げて席につく。

「……………」

「二美は相変わらず無口か…」

雄一は、ボソツと呟いて鞆からヘッドフォンを取り出した。

一樹、二美は一卵性の双子で、そっくりな顔つきのせいで一樹は、たまに間違われ女子トイレに連れて行かれかけた経験がある。

「よし、みんな座れ！」

今日から担任になる、大場だ　　ヨロシク」

クラス全員がため息をつく。

大場は、「今から、無事高等部に進学できた、お前らに高等部での規則等を説明して行くぞ」と言っ、て、自前のチヨークを持って振り返ると

「黒板がない！」

大場の声は、奥の方にある校舎に当たって跳ね返って来た。

「先生！」

一樹が手上げ、大場を振り向かせる。

「なんだ？」

「こんなんでクラスが成り立つんですか？」

一樹の質問に対して、大場は笑いながら答える。

「クラスというのは、生徒と教師、教室があれば成り立つ……成り立ってない！」

クラス全員がまたため息をつく。

「こんなんで大丈夫かねえ？」

「行けるんちゃうん？」

「無理じゃねえか？」

流石の啓之も呆れていた。

その横で、雄一は机に足を乗せ、音楽を聞いていた。

個人面談

「今日は、一日かけて一人ずつ面談していく
残ってる奴等は静かにしてろ
順番は適当に呼んでくから……」

大場が、教卓の前に立って話して始めた。

「面談か……」

「雄一は大場と面談初めてか？」

「うん……」

「オイラもだねえ」

雄一が頷くと、その後に佐山が続いた。

「どんな感じなのかねえ？」

「面倒だということだけは言えるな……」

「……………ヤダな……」

そして、ヘッドフォンをして机にふせた。

「んじゃ〜最初に 佐山昭吾」

「オイラからねえ」

立ち上がり、大場の後について部屋を出て行った。
1人目佐山昭吾

「え〜と、中等部最後のテストは何点だった？」

「258点かね……」

大場が黙り、佐山が照れ笑いを浮かべていた。

「300点満点中か？」

「1000点満点だったかねえ……」

大場の顔が凍り付く。

佐山は、大場の手がグーになっていることに気が付いた。

「（この点数はヤバいかったかねえ……）」

「ヤバい所ではないな」

「（心を……）」

「読んだぞ！」

キョトンしている佐山に、大場は拳を振り下ろした。

ゴンッ！

「イタイねえ……」

「……特技はなんだ？」

頭に出来たコブをさすりながら考えていた。

「………ジャンケンかねえ」

「………わかった

よし戻って良いぞ」

7人目 織田 一樹

一樹は、大場の向かいに座る。

「まず最初の質問だ

中等部最後のテスト何点だった？」

「225です」

「300点満点中だな？」

「いえ、1000点満点中です」

胸張って堂々と答える。

ゴンッ！

「イタイですよ……」

「あっ……スマン

女子に手をあげるとは……」

「女子じゃないです……」

「女子ではないって」

そう言いながら個人名簿に書いていた。

「それでは特技はなんだ？」

「走ることです」

即答し、大場に促され教室を出て行った。

「おー一樹どうだった？」

「殴られました」

でも…去年ほど面倒じゃなかった」

「言った道理だったねえ」

「そりゃあラッキーだぜ

なあ雄一」

「そうだな

あつ…パン持って来るの忘れてた」

雄一の緩さに、周りは苦笑いを浮かべてあつた。

そのとき、加藤が戻り、佐々木が呼ばれて行つた。

これでクラスの半分である22人目の生徒が面談を終わつたことになる。

28人目関西 今日子

「中等部最後の…」

「296点やで」

「それは…」

「1000点満点中の

特技は野球

それと拳骨は勘弁な

ほな」

周りから聞いて質問がわかつていたのでサラッと答え、手を振りながら教室をで手行つた。

33人目坂出 啓之

「最後のテストの点数は？」

「301点っす」

「何点満点中のだ？」

「500点くらいだったすかね」

「……1000点だ」

ゴン！

ゴン！

「なんで二発なんすか？……」

「先程の分だ」

啓之には、見に覚えのないことだったが

「さっきクラスで悪口言ったことですか？」

ゴンッ！

「なんで？」

「今のは、その分だ」

…特技は？」

「基本何でも出来ます」

そう言つて教室を出て行つた。

4 3 人目 織田 二美

4 4 人目 高山 雄一

「なんでボクたちは二人なんです」

「……………」

「二美の言葉は聞き取れんからな…通訳だ」

大場の目に睨まれ、黙って頷く。

「最後の点数は？」

「……………」

「……………聞き取れません」

ゴンッ！

「何のための通訳だ」

「そんな横暴な…」

涙目になりながらコブをさする。

「何点なのさ？二美」

「……………点…」

「953点？」

二美はバカだな

ウチの学校は、500点満点だよ」

「バカはお前だ」

ゴンッ！

2段になったコブを頭に抱え、キリツとイスに座る雄一。

「で…お前は何点だ？」

「大体みんなと同じくらいかな」

「だから何点なんだ？」

「100ジャスト」

ガン！！！！

二美の隣りで、口から人型の魂をだして机に横たわる。

「……………」（大丈夫？）

魂が自分の顔の前で大きく×を作る。

「特技はなんだ？」

「……………」（料理）

「（しゃかしやか）」

魂が一生懸命に料理のジェスチャーをする。

それを見て大場は、顔をこわ張らせて言った。

「居合い斬りだと！！」

「違うわ！！」

雄一が、魂を口のなかに押し込み立ち上がり言う。

「じゃあなんだ？」

「料理ですって」

「お前は？」

「勉強」

親指を立てて言う。

ガン！！！！

「じゃあ頼むぞ」

「……………」（わかりました）

口から魂を出している雄一の襟を引っ張り出て行った。

「まったくオオバカのやろう……」

大きなコブを作り、クラスの机にあぐらをかいて座っていた。

「まあ楽に終わって良かったじゃねえか」

「そうですよ」

「殴られ損な気がすんだよな……」

「まあ……いんじゃないのかねえ、楽に終わったし」

「みんな同じことしか言わへんな」

笑いながら関西は呟いた。

その横で、二美は笑っていた。

「え〜と全員終わったわけだが……このクラスは困ったもんだな……」

ため息をつきながら言う大場。

「こっちのセリフだぜ……」

「オレもそう思う」

ゴンッ！

ガン！！！！

「イテ……」

「なんでオレのほうが強いの……」

口から出かかった魂を無理矢理押し込む。

啓之も目から出かかった涙を押し込む。

「今度から週一大会もあるんだからしっかりしろよ」

大場の一言でクラスが凍り付く。

雄一は、周りを見渡すが誰とも目が会わない。

「なあ一樹…週一大会つてなに？」

「知らないんですか！？中等部の時、あれほどやってきたでしょ」

「エライ地獄やったな…」

「……………」（もうやりたくない）

「雄一は、1組だったから他の人がサボってた分を穴埋めしてたんだねえ」

「とりあえず負けたら楽しい高校生活はねえな」

「ふん」

「良くわかんないな……」

「今日、マカシンだ」

この後、話を聞いていなかった6人に、大場のミサイルチヨークが直撃した。

「校長7組はヒドすぎますでしょう……」

「織田姉妹を入れてるんだ学力、運動ともに問題あるまい」

「確か…一樹の方は男ですよ」

「それにどうせなら織田三絵も入れれば……」

「まあワシにも考えてものがある」

「それに佐山と坂出の問題児コンビ」

「それに関西だつて成績は底辺ですよ」

「ワシにも考えてものがある」

「……雄一君に関しては…なんで進級させたんですか？」

「ワシにも考えてものがある」

なにを聞かれても校長はそれしか言わなかった。教頭の頭を悩ませ続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3408/>

お気楽な言葉

2010年10月9日21時16分発行